すが、不幸の中で書院生は悩むことにならざるをえず、ジレンマに直面しなくてはならなかったということだろうと思います。

私は、ジレンマに悩みながら、だんだん悪くなっていく日本と中国との関係の現実に直面しながらも、悪くなっていくという与えられた状況の中、理念と良心を保ちながら、先ほどの外交官の石射さんのように、現実をできる限りプラスの方向に持っていこうとする辛さというか、ジレンマの解明が、この研究には絶対必要ではないかと思っています。毛先生のご報告の中で、辛い時代に青春を過ごされた方が戦後活躍されたとおっしゃっていましたが、こういうジレンマの体験が、戦後日中間の架け橋になろうという強い意志に結びついたのだろうと思います。

最後になります。いろいろと生意気なことを言ってまいりましたが、東亜同文書院の研究というものが今日の日中関係、あるいは日本とアジアの関係を考えるうえで、いろいろな問題を提起しうると思います。最初に葉先生がおっしゃったように、まさに日本と中国との共同による同文書院の研究が続くとするならば、これは単に研究者同士ではなく、両国間、両国民の友好促進に必ずつながると確信しております。ありがとうございました。(拍手)

藤田　どうもありがとうございました。短い時間の中でコメントをお願いしまして、大変申し訳ないことをしたと思います。全体的なお話をいただきながら、また栗田先生のこれまでのお考えを併せてご披瀝いただきました。どうもありがとうございました。

以上、10本の発表とコメンテーターの方のご発言が終わりました。ただいまから最後のディスカッションということで、会場の皆様方とご意見、お考え、あるいは事実関係も含めてやりとりができたらと思っております。いまから少しだけ配置を替えますが、すぐ引き続いてお願いしたいと思います。

質疑応答

司会　それでは、ただいまより質疑応答および総合討論を始めさせていただきたいと思います。現在のところ、ちょうど予定どおりに推移しております。こういった催しで予定どおりに進むのは非常に珍しいことでして、皆様方のご協力に非常に感謝しております。それでは、いま栗田先生のほうから、東亜同文書院の理念が卒業生、出身者に与えたものを精神史的、思想史的なところにも位置づけていくべきではないかというお話がありましたが、これについて、代表して葉先生、藤田先生にできましたらそのへんのお話をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

葉　来賓の皆様、友人の皆様、私たちは今日朝からすでに一日会議を開いてきました。皆さん、ご苦労様です。この交流会議は非常に成功していると思います。双方の学者はそれぞれ十分に交流を行っております。いろいろな見方があっても、願いは共通だと思います。われわれ中日関係が、双方の学者の研究がそうであるように友好的に発展していくことです。

コメンテーターのまとめがありましたので、簡単に補充してみたいと思います。交通大学は1896年につくられました。いまは111年目です。交通大学は理工系の大学ですが、いま総合大学に生まれ変わっております。理・工・農・医すべてあります。学生は5万人で、本科生も研究生もいます。教育部の重点大学です。

ここの多くの友人が交通大学においでになりたいということですが、連絡先は2カ所あります。一つは、われわれが来た交通大学校史研究室です。

もう一つ、対外的な連絡を担当している国際交流室があります。国際的な友人との連絡、交流を担当している部門です。いつごろかというのは、皆様方のご都合に合わせて交通大学においでいただきたいと思います。上海へのおいでを歓迎いたします。以上です。

司会　どうもありがとうございました。先ほどの質問にもお答えいただき、ありがとうございました。では藤田先生、お願いいたします。

藤田　いきなり回ってくると思いませんでした。今日はいろいろな意味で初めての本格的なシンポジウムがこういうかたちで実現して、いろいろな各論のご発表があり、最後にコメントをいただきました。その中で、今後の課題として、武井さんらが主張されたことを踏まえて発展的な意見をいただきましてありがとうございました。

先ほどのような時代的な背景の中、私が書院研究をスタートしたころはまだ80年代でした。そのころは先ほどコメントのあったような状況もあって、とりわけ私は地理学でもありましたので、大旅行のほうから入りました。これはある意味非常にスムーズだった。もちろん学生諸君が書いた文字は手書きですので、なかなか難解なところがあります。きれいな文字もたくさんあるけれど、難解な文字もたくさんあり、途中で、なぜこんな泥沼の中に足を入れたのかと何回も反省したことがありました。

大旅行を見ていきますと、先ほどもコメントでいただいたように、学生諸君の記録の中に、事実をきちんと書かなければいけないのと同時に、ご自分の感想や意見等がちらちらと書いてある。そういうところを見ていくと、当時の書院の学生の方々が、書院でいったいどういう教育を受けているのかということがわかってきます。そのあたりを集約していくと、書院の神様といわれている根津院長を始め、歴代の院長の方々、あるいは書院自体が次第に発展していく過程の中、書院そのものの持っている性格、ポジションに学生の方々も非常に強い自信を持たれて、ご自分の意見を少しずつ披瀝されているところがあります。

多くの方々がいろいろな意見をおっしゃっていますが、そういう日記の中に書院の方々の個人的な見解も含んだ記録があって、それをうまく整理していくと、先ほどの根津先生の思想であるとか、大内先生の思想、そのバックの近衛篤麿の考え方などにアプローチできていくのではないかと考えています。私は政治思想史は専門ではないので、そういうことからアクセスすることによって、政治あるいは思想的な考え方とどこかでドッキングできるような切り口、あるいは提供できる材料をつかむことができる。私の側面からいうと、そういう研究が今後できるかなと思っております。

書院の精神は21世紀のアジアを考えるうえでも非常に先駆的だったと思います。先進的な思想がたくさんあった。そのあたりを再度きちんと評価していく作業が今後非常に重要だと思っております。以上です。

司会　ありがとうございました。それでは、会場のほうからご質問あるいはご意見等をお受けしたいと思います。本日は研究者の書院についての発表ということで、こちらの会場の中には東亜同文書院ご出身の方もおられると思いますが、ちょっと別の視点でお話があったということだと思います。もし何かご指摘、ご質問がありましたら、挙手をお願いいたします。挙手されたあと、指名されましたらお名前をおっしゃっていただいて、ご質問をお願いいたします。ではどうぞ。

坂下　書院の40期卒業の坂下と申します。私はもう年ですから聞きづらい面があるかと思いますが、恐れ入ります。最初に交通大学の先生方に感謝を申し上げたい。われわれは1939年に入学したのですが、交通大学の校舎を使わせていただきました。そして、菅野俊作君は、江沢民主席が来られたときに「おゆるしください」と言いました。そういう気持ちがわれわれには非常に強かった。ですから、交通大学に行きたいと思って

も、交通大学の方々と対等に話はできない。まず謝らなければいけないという気持ちが、われわれの年代には非常に強かった。いまの先生方のお話で、1937年以来、好むと好まざるとにかかわらず、われわれは侵略戦争に利用された。これは否定できません。しかしながら、先生方に肯定面も評価されたことで非常に安堵いたしました。これから交通大学に対して非常に安心感を持って接しさせていただけると、われわれは考え、今日のお話を非常にありがたく伺いました。

2番目に大旅行ですが、われわれの時代は点と線といいますか、点は都市、線は交通手段です。これらは日本が占領していて、そこ以外に行く場合には自分の責任で行けということでした。私は包頭まで行って、それから西へ行くときには自分の責任で行けと言われました。去年、私が敦煌に行きましたが、唐の詩人の王維の「君に勧む、さらに勧む、一杯の酒」というのがありますね。「西のかた、陽関を出れば故人無からん」。こういう気持ちで包頭をあとにしました。黄河沿いに歩いて、ロバに乗って、3名の仲間と一緒に遡りました。一日ロバに乗って歩いて、蒙古のパオに着きました。そこで非常に歓待を受け、ヒツジを1頭殺してわれわれにごちそうしてくれた。その人たちは、日本がどこにあるかもあまりはっきりしていませんでした。そういう純粋な人たちに会って、あの大きな平原を見て、われわれは中国にはとてもかなわない、中国とは永久に手を握るべきだという感を強くしたわけです。

それから、広州交易会がありますが、われわれの年代はあれには非常に多く参加しています。各商社の広州交易会への代表はほとんど同文書院の卒業生で、われわれの年代が中心でした。ですから、広州へ行って同窓会も開けた。ただ、一方ではそういった否定的な面を承知していますので、大っぴらに言うことを避けたわけです。しかし、いま先生方のご意見を聞いて、ちょっとほっとした気持ちになっております。

もう一つは、1990年代までは否定的な評価が多かったが、それ以後、なぜ評価され直したのか。同文書院を引き継いでいた最後の本間学長が日本へ帰られて、愛知大学をつくられた。そして、愛知大学の藤田先生、今泉先生、武井先生などが書院の資料を引っ張り出して、宣伝というとおかしいですが、やっていただいた。それが一つあるし、栗田先生のように、卒業生のことまで聞き出して出版していただいた。こういう功績が非常に大きいと思います。愛知大学に対して、われわれ卒業生は心から感謝の意を表したいと思います。これは滬友会全員の気持ちだと思います。以上、数点申し上げました。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

司会　ありがとうございました。同文書院の卒業生の方から、非常に心温まるお話をいただきました。それでは、先ほどお手を挙げていた方にマイクをお渡ししたいと思います。

渡辺　私は同文書院には関係ないのですが、愛知大学が初めてできたときの学生です。あのとき集まってきた人間が360人、おそらく生き残っているのは3分の1、若い私も80歳を超えましたので、記憶がだんだんとなくなっていきます。

同文書院の歴史は、日本の歴史がまだしっかり総括されていないところにいろいろな問題点があるのだと思います。近衛篤麿さんが非常に名門で、しかも大アジア主義と高い理想を掲げた。そして、その下に生まれた、いまの安倍総理よりももっと血統のいい坊ちゃん政治家、坊ちゃん宰相が近衛文麿さんです。これは同文書院にも大変な影響をもたらしている。日本と中国との関係を怒濤、動乱の中に巻き込んでしまった悲劇のヒーローでもあります。

文麿さんは学習院から東京大学を経て京都大学へ進み、河上肇とか佐々木惣一など、天皇機関説、いわゆる憲法観など新しい学問をしっかりと身に付けて、上海の同文書院にも新しい学風を吹き込まれた。これがプラスの面になります。

しかし、日中戦争の中、戦争拡大を防ぐための青年宰相が、革新官僚と軍部の暴走におだてられて、さらに外務官僚の大島や松岡などイタリア、ドイツのリッペンドロップ外交に引きずり回される。これも近衛内閣の悲劇です。

さらに、東条内閣の平和の糧として推薦した。これがとんでもない目にあい、大変悲惨な戦争を引き起こした。終戦の最後の切り札は近衛さんだったと思います。鈴木内閣を支え、日本を終戦に導いた最大の功労者は近衛文麿ですが、顧みるものは誰もありません。近衛文麿はさらに東久邇宮内閣に、日本が生まれ変わるための憲法改正に取り組み、京都学派の佐々木惣一先生のところに入り、あるいは松本烝治先生を含めて、日本再生の方策を必死になって立てていたのに、マッカーサー司令部により一喝されて、ホイットニー憲法でグチャンコを起こしてしまうわけです。

近衛文麿をどう総括するか。そして、日本の歴史を本当に振り返って何か。大隈内閣の21カ条要求は国益、国益と称して、民族自決、独立自尊、弱小民族に対して敬意を払わなかった日本の歴史を本当に総括して、正しい歴史的視点をきちんと合わさないと、同文書院の本質も生かされないのではないかと思います。私のつまらない見解についてお導きのほどをお願いします。

司会　ありがとうございました。歴史にはいろいろな見方があると思います。これが正しいということを押し付けることはできませんが、武井先生、いかがでしょうか。何かお話しなさることがありましたら。

武井　ではご指名ですので答えさせていただきます。近衛文麿をどう総括していくかということですが、近衛文麿というのはどちらかというと日本を戦争に導いたマイナス的なイメージで、中学校などでは教育されていると聞きます。この近衛文麿をどう総括していくか、書院との関連の中でどうとらえて総括していくかというのは非常に難しい問題だと思います。ですから、この短い時間の中ではっきりとはお答えできないのですが、ただ、戦争期に内閣総理大臣になったときの近衛文麿のイメージで、同文書院長を務めた時代の近衛文麿をとらえるのはやはり困難があると思います。その時代、その時代における人物のあり方を見つめていくのが大事になっていくと思います。

先ほど、近衛は戦争へと日本を導いたというマイナス的なイメージでとらえられていると言いましたが、そういったイメージで近衛の人生全体をとらえることはできませんし、同文書院院長時代の彼の思想、性格をとらえるのは難しいところがあると思います。これは人物研究の範疇に入っていくと思いますが、歴史の中で近衛がどういう人生を歩んでいったか。その中でどういう思想、価値観を持っていったかという点も、併せて深く考えていく必要があるのではないかと思います。

司会　ありがとうございました。武井先生と同じく研究史についてまとめられた欧先生、何かお言葉はありますでしょうか。

欧　先ほどの問題ですが、確かに興味を覚え、注目を覚えました。いまはそれについてあまり研究してきませんでしたので、今後の研究の中で注目していきたいと思います。特に書院の院長の思想、それと時代とのかかわり合い、そして同文書院に対する影響などについては、今後の研究課題として考えていきたいと思います。ありがとうございます。

司会　ありがとうございました。まだ若干時間が取れますので、お一方、お二方ございましたら。

劉　皆さん、こんにちは。私は愛知大学の現代中国学部の劉柏林と申します。愛知大学で言語文化方面の研究をしております。仕事の関係で、愛知大学と同文書院の特殊な関係についても興味を持っております。東亜同文書院の歴史についても少し研究、理解しております。

東亜同文書院の発展の歴史は、中国、日本の歴史と切り離して考えることはできない非常に特殊な関係があると思います。中国・日本両国の関係、

その他の国との関係とは違った特殊性を持っています。東亜同文書院は、中国の学校設立の中で、後の人たちが研究するに値するような課題もあると思います。先ほど皆様方がおっしゃったような学校の指導者、その人たちの思想についても研究すべきであると思います。学生の大旅行の旅行記も非常によい歴史の資料だと思います。ですから、中日両国の学者は手を取り合って、この歴史資料を集め、研究すべきです。

それから、書院の卒業生の皆様方、たとえば坂下さんもいらっしゃいましたが、中国について特別な感情をお持ちだと思います。7年ほど前、先ほどの坂下さん、小崎さん、鈴木さんなど、昔の卒業生の皆様方と一緒に上海の交通大学を訪問したことがあります。黄浦江のほとりでそこを見学したとき、皆様方は、自分たちが死んだあと、その骨はぜひ黄浦江に撒いてくれというお話をされていました。毛さんもおっしゃっていましたが、この友好事業に参画されていた方たちです。書院の卒業生の皆様方は、上海について特別な感情をお持ちです。ですから、自分が死んだあと、自分の骨を黄浦江に撒いてくれというお話でしたが、私はそれを聞いてびっくりしました。日本のお年を召した方たちがそういったことをおっしゃるのは、上海について非常に特別な感情をお持ちだということ。私どもはこのような精神をしっかりと研究しなければならないと思います。中日両国にはこのような歴史の背景があります。両国の間にこのような気持ち、感情があるということは、皆さんがしっかり研究すべきことだと思います。

それから、書院の調査報告の中には日本でまだ見つかっていないものがあり、中国の国家図書館の中にあります。北京の国家図書館の中で見たことがありますが、非常によい資料が残っています。しかしながら、それはまだ公開されていません。愛知大学、同文書院大学記念センターでもいろいろな策を練って、ぜひこの資料を収集なさってください。調査報告でも、訪問記、旅行記でもいい。日本の文化遺産でもあり、中日両国のすばらしい文化遺産でもあるからです。この調査報告によって、中国の近代社会の発展の変遷もわかります。政府、民間、普通の人々の生活などいろいろなことがわかります。この資料は非常に得難いものです。ですから、学者の皆様方、ぜひ関連各部門といろいろ連絡を取り合って、この資料の収集に力を尽くしていただきたいと思います。ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。貴重な意見をいただきました。では大島先生、最後にお願いいたします。

大島　愛知大学の大島と申します。私はいまから7～8年前、『愛知大学五十年史』を編纂させていただきました。ここ数年来、あるいは10年前ぐらいから、愛知大学の前身校が東亜同文書院であると位置づけられるようになってまいりました。私は愛知大学の教師で、東亜同文書院とは何の関係もなかったのですが、東亜同文書院、前身校がどのような大学であるのかを真剣に考えるようになりました。そして、ここ2～3年、それについて研究を始めました。

本日のシンポジウムで私は大変いろいろなことを学ばせていただきました。単に日本の研究者だけでなく、中国の研究者の皆様方も東亜同文書院には肯定的な面が多々あったと。いろいろ否定的な面もあったけれど、それはいわば日本の当時の軍部や当局者によって強いられた、強制された面が強いというご発言があり、私は大変安心いたしました。

しかし、二つばかりお聞きしたいことがあります。一つは、東亜同文書院の成立期、最初期、非常に高く評価していただいていますが、その高さにおいて、馬場先生と栗田先生ではややニュアンスの違いを感じました。馬場先生は、東亜同文書院あるいは東亜同文会が中国の保全ということを言っているが、東亜同文書院の創立者は、日本は台湾を植民地化し、中国分割に参加し、中国保全

に敵対する行動を行っていないと、アジア主義については評価されながらも、やや低い評価をされています。

私が知る限りでは、当時のアジア主義には二つの傾向がありました。一つは、孫文などの国民革命を支持していくような宮崎など革命的な動きと、もう一つは、既存の政治体制、国家体制を認めたうえで、その了承の下に教育を行って、日中の経済発展のための要員を育成しようという穏和な枠組みのアジア主義があったように思います。そのへん、馬場先生の評価はわかるのですが、栗田先生はどういうふうにお考えでしょうか。

もう一つ簡単に。昨日、私は直接栗田先生にお話ししたのですが、時間がなくて聞き損ねたことがあります。先ほど渡辺さんが言いました、東亜同文書院の一つのキーポイントといいますか、それをどう評価するかは、近衛篤麿ではなく近衛文麿にかかっていると思います。これについての栗田先生の本は大変参考になり、お世話になったわけですが、そこに中山優についての叙述がありまして、その中で近衛文麿について若干の論述がなされています。栗田先生の近衛文麿論を聞かせていただきたいと思います。

司会　ありがとうございました。時間がかなり押しておりますので、栗田先生、いまのお話を二つ、成立期の評価のお話と、近衛文麿の評価の話を簡潔にお願いいたします。

栗田　成立期に関してですが、先ほど馬場先生のご報告を聞いて、私とちょっと違うのかなと、私自身も感じました。確かに台湾を併合したときは積極的、ではその後の台湾経営に発言しているかというと、そこを攻められると弱いという気はします。ただ、近衛篤麿が同文会あるいは同文書院をつくるきっかけとなったのは、まさに日清戦争後の驕慢化する日本国内の対中国に対する見解、あるいは日本を含む世界の列強の支那分割への動きとそれに対する反発、そして単に言っているだけではだめで、自分の考えを引き継ぐような若者たちを育てなければいけないという目的意識から書院をつくっていると思います。ですから、体制に迎合的であったとは私は思っておりません。これは近衛篤麿や根津などもそうだと思います。

それと、このことと絡むのですが、東亜同文書院には優秀な方が多く、県費生が多い。当時のデータを見てびっくりしたのは、私が調べたころは国策学校みたいな言い方をされていたので意外だったのですが、近衛篤麿が生きているころ、協力しない府県がものすごく多いんですね。何かというと、近衛篤麿というのは血筋からして貴族の筆頭ということだけで見られてしまいがちですが、当時の藩閥内閣に対してかなり一線を画していた。対中国論もそうですが、一線を画した姿勢をとっている。それから、先ほど申し上げましたように、彼はイギリス流の議院内閣制、もちろん天皇制を前提にしたうえで立憲君主制の信奉者です。これも藩閥官僚にとっては好ましくない。しかも悪いことに、彼らには手が出ない。普通の民間人であればつぶせるのですが、とにかく天皇家に一番近い方ですからつぶせない。そういうこともあっておそらく息がかかっていたと思うのですが、半分ぐらいの府県が非協力的でした。山県系官僚、伊藤系官僚が知事をやっているところです。

そういう事実からしても、政府のやり方に関して完璧に反対ということではなく、たとえば日露戦争のようなときは国家の大事ということで協力はしていますが、体制べったりではない。体制内の一つの批判勢力としてのスタンスを保つというふうにとらえています。

そうはいっても、東亜同文会は中国に対して考えを持つ人たちがちょっとした違いを超えて集まるということでできていますので、中を見ると、孫文支持派、そうでない人などいろいろいます。大きく分けると、近衛さんとか根津さんというのはどちらかというと孫文、あるいはその変法派ですが、そうではない方々もいます。それと、メン

バーの中でも近衛さんなどは中国ということをかなり重点的に考えていますが、中国に出ていくのが日本にとって利益になるというかたちでメンバーになっている方が少なからずいます。たとえば内田良平などもそうです。

私はある論文で書きましたが、北清事変のとき、同文会分裂の危機に直面します。というのは、北清事変を機に、内田良平などは、中国に出ていく機会ではないかと。それに対して近衛はあくまでもだめだと。北清事変が終わったとき、内田良平に近い人々は、同文会の総会で近衛批判をやります。そういう意味からすると必ずしも一枚岩ではない。

ですから、同文会の評価ということになると、その中の右派という言葉がいいかどうかわかりませんが、そちらに重きを置くと、当然馬場先生的な評価につながっていくのではないかと思います。また、近衛さんとか根津さんのほうに重きを置きますと、決して国策べったりではないという評価につながってくるだろうと思います。そういう意味も含めて、明治時代というのは、大正、昭和になると真っ二つに分かれていくような中国観を持ったグループが、一つの東亜同文会というところにまとまっている。これはまさに明治の時代というものを象徴的に物語っているという気がします。

いずれにしても非常に難しいご質問ですが、書院に関しては、支那保全、中国保全ということを前面に出しながら、最後の卒業生の方に至るまで、ある意味では日本の軍部からも白い目で見られながらも、とにかく日中提携を一生懸命やろうという方々が多かったと思います。

二番目の近衛文麿の評価は非常に難しいと思います。極論すると、少なくとも昭和前期は近衛文麿評価に非常にかかわってくることだろうと思います。私は学生の前でよく言っているのですが、人間の適性というものはいろいろある。思想家として非常に優れた人もいるし、政治家として非常に優れている人がいる。優れた思想家であっても、政治の場になってくるとそのすばらしさを十分に発揮できない方もいる。近衛さんのお父さんである近衛篤麿公爵は若くして亡くなりましたが、政治家としても、思想家としてもきわめて優れた方だった。いい意味で自分の五摂家筆頭という立場を利用しながら、自分の理想に向けて、伊藤、山県どんなものだという感じで現実に移していった方だと思います。惜しくも40歳で亡くなってしまいますが。

それに対して文麿公は、思想的にはお父さんの思想を受け継いでいる方だと思います。たとえば第一次大戦が終わったあとの有名な「英米本位の平和主義を排す」。もちろんこれは日本の立場ということもあったのですが、ベルサイユ条約のときに人種条項を撤廃します。あらゆる人種は平等でなければいけない。これがいわゆる白人列強の圧力によって結局は講和条約に入らない。これに非常に憤りを感じ、近衛文麿氏は「英米本位の平和主義を排す」という有名な論文を書かれています。これが孫文の高い評価を得ているのは、ご存じだろうと思います。この思想は亡くなるまでずっと持っていただろうと思います。

武井さんのお話のように、政治家近衛としての発言と、私、同文書院の昭和編をまとめるときに、書院で話をされている近衛さんの草稿をまとめたことがありますが、かなり違いがある。書院の来賓として出席されたときは、とにかく君らが頑張って、いまの日中の状態を変えなければいけないということを力説された。教育者近衛としては、まさに思想家近衛の延長線上にある日中提携、英米本位の平和主義を排すという理想を追求されていたと思います。

ただ、現実の政治のうえでそれがどうなったかといいますと、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、近衛内閣ができるとき、あらゆる方面から期待されました。軍部のほうでも期待していたし、軍部を抑えることができるのは近衛公だけだ

ということで、あらゆる方面から期待された。そして、失礼なことを申し上げると、結果としてはあらゆる方面から失望されてしまったということになるわけですが、戦争の不拡大方針ということは理念として持っていらっしゃったと思うんですね。ところが、現実的にズルズルというのは非常に悪い言葉ですが、結局は押されるようにあのような事態になっていく。それから「蒋介石を相手にせず」という発言。これはあとでご自身で訂正されていますが、そういう発言も出てしまう。そういう面で、ご自分の理想を現実政治のうえに移せなかったという問題点はあるだろうと思います。

ただし、先ほどコメントのところで申し上げましたが、官僚や政治家というのは思想だけで動くものではありません。まさに自分が与えられている現実を前提としたうえでいかに理想を実現していくか。これが政治家、官僚としての腕にかかってくると思います。石射さんなどというのはそこらへんが非常に優れた方だと思いますが。近衛さんというのは、現実をどうにかしなければいかんと思いながらも、それができなかった。そういう意味において、政治家、官僚としての近衛さんの評価は非常に難しいことになると思います。

ただ、第一次内閣を辞めるとき、かなり厳しいことを言っています。ご自分に対する批判があることを重々承知のうえで、軍部の統帥権であるとか、軍部大臣現役武官制を痛烈に批判されています。もしこの軍部大臣現役武官制あるいは統帥権というものがなかったら、俺はもっといいことができたということを、戦後の弁明ではなく、内閣を最初にお辞めになるときに言っている。これは本音だろうと思います。現実的には、そういうことを言わなくてもできたのではないかというご批判もあると思いますが、理想というものをお持ちになりながらも、現実政治を動かせない。これを能力というのはきついところもあると思いますが、当時の日中関係の中で一つの悲劇として近衛さんが出てきたという気が、私などはいたします。

それから、戦後出た『平和への努力－近衛文麿手記』はいかにも自分の立場を弁明しているかのような評価が今日でもあると思います。しかし、同文会史の小編を見ているときに、私の知っている若い人が見つけてきて、私に見せてくれたのですが、あの草稿は戦争中に書いているんですね。ですから、決して戦後弁明で書いたものではない。まさに戦争中、自分のやってきたことに対するいらだちもお感じになりながら、ああいう手記をまとめていらっしゃる。同文書院生のジレンマを申し上げましたが、まさに理念と現実とのジレンマで悩む一人の政治家ということになるだろうと思います。ただ、政治家の場合には一人で悩めばいいという問題ではなく、そのジレンマが即国策に反映してくるところが辛さだろうと思います。

ですから、近衛評価を簡単に言えというならば、思想家としての近衛は近衛篤麿の延長線上にある人間で、登場したときは中国側も期待したところがあっただろうと思います。しかし、それを現実政治の上に移せるということに関してはクエスチョンかなという気がします。ただ、そういう家に生まれなければ、思想家として立派だったかなという気もいたします。

司会　ありがとうございました。丁寧にお答えいただきましてありがとうございました。これをもちまして、本日のすべてのシンポジウムを終えさせていただきたいと思います。本日座長をお務めいただきました葉先生、藤田先生、ご報告いただきました先生方、お集まりのフロアの皆様、そして非常に美しい日本語、中国語の通訳をお願いしました通訳の方々、スタッフ、皆様のご協力の下、貴重なシンポジウムを得ることができました。本日のご協力を感謝いたします。どうもありがとうございました。こういったところで培われた日中の友好を基に、また東亜同文書院を日本の歴史、中国の歴史といったところに位置づけて、いろいろなところで友好関係を結んでいければと考えて

います。本日はどうもありがとうございました。　（拍手）